

九番姫は獣人王の
最愛となる



すなぎもりこ

Moriko
Sunagi

目次

九番姫は獣人王の最愛となる

5

番外編

側近達の番物語

205

書き下ろし番外編

【ヌルバ編】死にたがりと白い花

349

九番姫は獣人王の最愛となる

獸人国に嫁ぎます

「九番、お前が行け」

「は？」

アナベルは虚をつかれて思わず間抜けな声を上げた。

王座から見下ろす禿げた老人は、ちっと舌打ちをする。

「いつ見ても間抜けで醜い娘だ。儂の子とは思えん」

（ええ、私も貴方の子とはとても思えませんし、思いたくありませんが）

アナベルは心の中で同意した。

「卑しき獸人など美醜の区別もつかぬだろうから、他に嫁ぐ当てもないお前が適任だと言っている。名誉に思うがよい。穀潰しだったお前が、国のためにその身を役に立てられるのだからな」

脇を固める大臣らが王と共に卑しく嚙う。傍にいる妹と姉がアナベルの腕にすがりつ

き、心配そうに見上げた。

「かしこまりました」

アナベルはすんなりと承諾する。

その可愛げのない態度に王は眉を上げ、フン、と鼻を鳴らした。

「獸人は絶倫だということからな、残された日々はせいぜい体力作りに励め」

下品に笑う顔からは、父親の情を僅かも感じない。

「子が生まれても報せなくていい。卑しい血の入った醜い赤子など見とうないからな」

「承知いたしました」

頼まれても会わせるもんか、とアナベルは思う。

もし赤子ができたとしても隠し通す。

この腐った君主が孫を可愛がるなど、決してあり得ないと知っている。

子供を道具として量産し、息子はすべて戦場へ送り込み、娘はすべて貢ぎ物扱い。我が子を番号で呼ぶ奴に、人の血など流れていない。人間の皮を被った汚物だ。

王は己の力量も知らずに相手構わず闇雲に戦争を吹っ掛けた。結果、戦況が苦しくなったところで泣きついたのが、高い身体能力を持つ最強の兵士を有する獸人国だ。

その助けでもらった国に対して、感謝もなければ敬意の欠片もない言い草。呆れて開

いた口が塞がらない。

馬鹿が治めるこの国に未練はケシカスほどもなかった。むしろ出ていけてラッキーだ。アナベルは王に平伏しつつ、舌を出す。

王女が住まうには簡素すぎる部屋に戻ると、姉妹がアナベルに駆け寄った。

「アナベルお姉様、本当に行ってしまうの？」

心細げに妹のアイリスが訊ねる。

「アイリス、守れなくてごめんね」

アナベルは小柄で可愛い妹を抱き締めた。

「獣人は強いけど、短気で野蛮だと聞くわ。貴女は気が強いから心配よ」

姉のマーガレットが眉を顰める。

「大丈夫。そんなの大臣達が吹聴しているだけよ。自分達の不甲斐なさを誤魔化すことに懸命なの、揃いも揃って馬鹿よね」

十二人いた王女は次々と他国へ嫁がされ、現在残るのはアナベルを含めて三人のみ。

「二人を残していくのだけが心残りだけど、いずれ何処かに嫁がされる身、この国に比べたら何処だってマシよ。……幸せを祈っているわ」

三人は抱き締め合った。

獣人国

ものの価値が分からぬ獣人に与えるものはないと、何処までも横柄な王は、アナベルを身一つで嫁がせようとしていた。

アナベルは僅かに持っていた手持ちの宝飾品を売り、そのお金で獣人の王に献上する品を用意する。そして、着古したドレスを自らリメイクして身に纏った。加えて、獣人国に向かう途中の山で自ら弓矢を射り、鹿と猪とウサギを捕らえ、土産とした。

アナベルの母親は小さな部族の長の娘で、王に略奪されてアナベルを産んだ。母はアナベルを愛し、部族に伝わる狩りの技術を授けてくれた。

くすんだ灰色の髪にエメラルドの瞳、背が高く痩せぎすな母親。その母親に似たアナベルは、周りから醜いと言われて育つ。

しかしアナベルは、真に醜い王に似なかったのをとても名誉なことと喜んでいる。そんな彼女は川沿いを上り、谷を渡り、山を越え、長い道のりを経て、漸く獣人国に到着した。

見上げんばかりに聳え立つ重厚な鉄の扉の両側に、甲冑をつけた大柄な兵士が立っている。

御者が馬車を止めると、兵士の一人が近付いてきて一言二言、御者と言葉を交わした。領いた兵士が、もう一人に合図を送る。合図を受けた兵士は巨大な門を外し、砂埃を舞い上がらせて門の片側を開いた。

（もの凄いい怪力……これは敵に回したくないわ）

馬車は獣人国の中に進んでいく。乾いた赤茶の道の両側に、色とりどりの屋根が並ぶのが目に入った。

町並みの規模は自国と変わらない。しかし、腐敗した王政の下で荒れ果てた自国の雰囲気とはまるで違う。活気に溢れ、店頭に鮮やかな品物がところ狭しと並ぶ。

アナベルは町を歩く獣人達を観察し始めた。

「可愛い」

思わず声を上げる。

獣人の姿形は人間と殆ど変わらない。

お尻にしっぽがあるのと耳の形が違う以外は。

その形や色は様々だが、しっぽと耳の色はだいたいそれぞれ揃っているようだ。

やがて、目前に城門と思われる石柱が見えてきた。門番の姿はない。

どうやら城の庭は一般に開放されているらしい。

アナベルはそこに獣人の王の統制力を見る。

国民や町の雰囲気からも分かる。きつと、圧政など敷いていない、真に国民に親しみ、愛されている君主なのだ。

若き獣人国王、シメオン。

いったい、どのような方なのだろう。その耳としっぽは、どんなだろう？

息苦しい母国から離れた解放感と相まって、アナベルはこれから始まる新生活と夫となる人物への期待が抑えられない。フワフワと浮遊するような心地だ。

やがて、砂埃を上げて馬車が止まった。

馬車の扉を開いて顔を覗かせた御者は、真っ青になり小刻みに震える。

「きゅ、九番姫様、着きましたでございます」

「ありがとう。どうしたの？ 震えているようだけれど、寒いのか？」

「い、いいえ、恐ろしくって……獣人の王様は人を喰うっていうから……おっかねえ」
彼は首を竦めた。アナベルは腕を組んで思案する。

「積んである荷物を下ろすのだけ手伝って。それが済んだらお帰りなさい。長い道のり

をよく勤めてくれたわ、ありがとう」

「付き添わねえでいいんですかい？」

「大丈夫よ。帰りは山賊にお気を付けなさいね。この辺りは出るそうだから」
アナベルは獲物を縛り付けたロープを解き始めた。

* * *

一方、そんなアナベル達の様子を聳え立つ城の窓から見下ろすいくつかの人影があった。

「あれが人間のお姫様ですか？ ……なんだか聞いていたのと違いますね」

「フオークより重いものを持たないって聞いたけどなあ……猪引きずってんぞ」

「確かに耳もしっぽもないけど」

「馬車の車輪バランスまで確認してんぞ」

「あら、御者を帰しちまった。手え振ってら」

「偽者にせものじゃないの。あの小賢こざかしい王ならやりそうじゃない」

奥の机の前で書類に目を通していた男が顔を上げる。

「煩いぞお前ら。とりあえず誰か迎えに「行け」

「俺、行くう！」

「私が」

面々は競うように部屋を出ていった。

部屋に一人残された獣人の男は、書類を机に投げる。

（側室なんていららないというのに、無理やり押し付けやがってあの老害。すぐにでも追い返したいところだが……）

男の名前はシメオン。獣人国の王だ。

就任してまだ三年の若い王だが、そのカリスマ性と君主としての手腕は国内のみならず、外交のない他国にも轟とどろいている。

その戦闘能力はすば抜けて高く、かつ、見目麗うつくしく艶あでやか。
しかし……未だ王妃がいない。

そこには獣人ならではの事情があった。

* * *

その頃、アナベルは城の前で大男達に囲まれていた。

「へえ、本当に耳が猿みたいだ」

「細っこいな」

「可愛い」

「お前ら失礼だぞ」

「姫様、遠方遙々よくお越しくださいました。お疲れのところ申し訳ございませんが、我が王にご挨拶いただけますでしょうか」

一番年若そうな丸っこい黄金の耳の青年が、胸に手を当てて腰を折った。すると、他の男達も慌ててそれに倣う。

アナベルはスカートを摘まんで片足を下げ、腰を下とした。

「お出迎えいただき、ありがとうございます。是非ともシメオン王にお目通りを」

礼儀はともかく、慇懃無礼な母国の大臣達より数倍マシだ。好奇心を隠さずマジマジ見てくるところも素直でよろしい。

アナベルは黄金耳の青年に手を引かれて歩き出す。

土壁の城内は、素朴だが温かい雰囲気だ。悪くない。

しかし、螺旋階段を上り、廊下を進み、また階段を上ると、体力には自信があるアナベルも息が上がってきた。

「大丈夫か、姫さん」

赤毛モフモフ耳の男が振り向く。

「ええ、なんとか。……まだ上るのですか？」

「まだ三つ階段を上がらねばなりません」

「おい、ベアル、姫さんを抱えてやれ」

一番大柄な小さな茶色耳の男が、よしきた、とアナベルを肩に担いだ。

（ええ!? 一応、王女だぞ。そんな粉袋を担ぐように……まあ、いつか。楽だわ、これ）
アナベルは力を抜き、ぐったりと身体を預ける。

「軽いなあ、姫さん。野菜しか食ってないんじゃないか、ちゃんと肉も食わねえと」

「ちゃんと食べてますよ。それでも母国では大食いで通ってました」

（無駄飯食らいつて、陰口叩かれてたけどね）

「人間って何を食べるの?」

「皆さんこそ、普段何を召し上がっていらつしやるのですか？ ……食が合わないと思うなあって、少し心配だったんです」

「あー、分かるわあ、それ。そうだよなあ」

「主食は米っていう穀物ですよ」

「へえ」

「水で炊いたらモチモチになるんだぜ。癖がないから、どんなおかずにも合う」

「へえ」

「イチオシのおかずは塩鮭しおさけだな、一切れで米丼十杯はいける」

「お前は食べすぎだよ」

和気あいあいと話しているうちに、王の部屋に着いたようだ。

長い黒髪から尖った黒耳を覗かせた男がノックする。

「姫君をお連れしました」

「……入れ」

低い声が聞こえ、扉が開く音がした。

アナベルは大男に担がれたまま入室する。

「……まさか、その担いでるのが姫か？」

半ば呆れているようなシメオン王の声が耳に入ってきた。王にお尻を向けての登場はかなり恥ずかしいが、致し方ない。

「おい、ベアル、姫を下ろせ」

ベアルがそつと優しく身体を肩から下ろしてくれた。床に足がついたことを確認すると、アナベルはすくつと背筋を伸ばし、彼に笑顔でお礼を言う。

「ありがとう。なかなか快適でした」

「いつでもどうぞ」

ベアルは、にかつと笑う。アナベルは獣人王がいるであろう場所を振り返り、腰を折った。

「この度は、半ば無理やり押し付けられた縁談をお請うけいただいたこと、加えて先の戦争でのご協力を、国を代表して心より感謝申し上げます」

* * *

シメオンは驚いていた。

あの無礼な王の娘だからどんなにか高慢ちきな女だろうと思っていたのだが、予想に

反してまともなようだ。顔を上げた王女をマジマジと見る。

灰色ストレートの髪は艶やかで、前髪から覗くエメラルドの瞳も利発そうだ。滑らかな白い頬に細い身体。

なかなかの美女である。

「堅苦しい挨拶はよい。……縁談を引き受けた以上、貴女の身の安全と不足のない生活は保障しよう。しかし、最初に話しておかねばならないことがある」

王女が神妙な表情で頷く。

シメオンは彼女にソファにかけるようにすすめ、自らもテーブルを挟んで正面に座った。

「人間は我々獣人についてよく知らないと思う。長い間、深い交流を絶ってきたから当然だが。我々は人間とは異なる習性を持つ。その一つが『番』という存在だ」

王女はシメオンの目を真っ直ぐ見つめて話を聞いている。

「我々獣人は生まれた時から『番』、つまり運命の相手が決まっている。獣人の血を持つ者は全員、例外なくだ」

彼女は頬に手を当てて暫し考え込み、淡々と確認した。

「……つまり、人間の私を妃にはできない、ということですね？」

「……その通りだ。しかし、貴女にも体面があるう。貴女の父上に難癖をつけられるのも、我が国としては面倒だな」

「ああ、あのジジイなら間違いない、つけ込んでくるでしょうね」

シメオンはきょとんととして目の前の姫君を見た。

「でも、あの臆病者に獣人国を探るなんてことはできません。定期的にそれっぽい手紙でも送っておけば簡単に騙されるでしょう」

側近達も顔を見合わせている。

「私はクソジジイとあの国にうんざりしてたんです。国を出る機会を与えてくれたシメオン様には感謝しております。全面的に協力します」

王女は片手を上げてシメオンに頷いた。

「……貴女は変わった姫君だな」

「よく言われておりました。王にも嫌われていましたから、こちらに来ると決まった時は厄介払いができたと言われましたわ。……それから、私のことはアナベルとお呼びください」

シメオンは思わず噴き出す。

「どんな高飛車な人間が来るのかと思っていたが、貴女となら上手くやれそうだ。よろ

しく、アナベル」

手を差し出したシメオンに、アナベルもニッコリ笑って手を出す。

シメオンはその白く細い指先に唇を寄せた。

「はっ?」

アナベルが頬を染めて目を見開いている。

「あれ? 人間の国ではやらないのか」

「いえ、あの、慣れていないだけです」

それまで堂々と背筋を伸ばしていた王女が縮こまるのが可愛らしく、シメオンはふつと笑う。

「体面上、アナベルは側室となる。寝室は同じだがベッドは別々だし、俺も決して手は出さない。安心してくれ」

「はい」

アナベルが頷いた。

* * *

じゃあ、お茶でも飲もうか、と側近の一人が言い出し、皆がそれぞれの場所^{くつろ}で寛ぎ始めた。

この部屋はシメオンの執務室兼会議室で、側近達はここに入り浸^びっているらしい。王と家臣の距離が近い。

母国では考えられない光景に驚きつつも、アナベルは居心地のいい雰囲気^{あんど}に安堵^{あんど}する。その空気に乗じて訊ねた。

「そういえば、側近の皆さんには番がいるのですか?」

四人は途端に目を逸^そらす。

「フォルクスはいるよな、既婚者だし、子供もいる」

フォルクスと呼ばれた金髪の大きめ耳の男が頷いた。

「あとは……まだ見つけられないでいます」

金色丸耳の青年は苦笑いする。

「俺が王になってからは忙しかったからな。国主催の合同見合いやパーティーは随分長く企画していないし、自治体主催のものにも参加できていないのだろう?」

シメオンが申し訳なさそうに言う。

「そのうち見つかるだろ」

赤毛もふ耳の男がのんびりと答えた。

「なんだか無理して探さなくてもいいかと思えてきてるんだ」

ペアルがお茶菓子をお口に放り込んだ。

「そういうわけにもいかないだろう。王に加えて側近も妙齢なのに皆独身だなんて、おかしい噂が立つては困る。王城勤めを目指す若者がいなくなったらどうする」

「ではまず、王が見つけてください」

金色丸耳に言い返され、シメオンは口をつぐんだ。アナベルは慌てて訊ねる。

「えっと、番というのは見れば分かるものなの？」

黒髪立耳の青年が答えた。

「そのへんは個人差があるようです。一目見て分かった者もいれば、触れてとか、匂いとか、実際一夜を共にして……とか」

「へえ、でも素敵よね、運命の人が決まっているなんて」

「そうでもないですよ。番を探すのは大変だし、年齢が離れていたりするとね、かなり悲劇です。出会った時に子供が望めないほど高齢になっていたり、相手が亡くなっていることも実際あり得ますしね」

「仕方なく諦めて番以外と所帯を持つ奴もいます」

「でも、俺達はそれが許される立場じゃないんですよ」

各部隊から選出されて側近を務める彼らは、より優秀な子孫を残す使命があり、それには『番』と添うことが必要不可欠らしい。

「そうか……それは、大変かも」

「……でも、どうしてだろう。僕もですけど、そこまで焦ってないんですよね」

金色丸耳の青年が不思議そうに呟いた。

「まったくそういう欲がないよな……」

赤毛もふ耳が同意する。

飄々としていた側近達の中で一人、フォルクスだけが暗い表情で皆を見つめている。アナベルはそれが妙に気になった。

ささやかだが歓迎の宴が催された。心配に及ばず、振る舞われた料理はすべて美味しい。

お米と呼ばれる穀物をはじめ、野菜、肉、魚、種類が豊富な上に新鮮で、そんなところからも、獣人国の豊かさが窺い知れる。

それから広い露天風呂をいただき、アナベルはご機嫌で寝室に入った。

シメオンは既にベッドに入って本を読んでいる。

長めのプラチナの髪に思慮深いアメジストの瞳。ずっと通った鼻筋に甘い口元。そして髪の間から立ち上がる大きな黒い耳。

正直、アナベルは一目でその美貌に見惚れた。

しかし、この美しい王の妃になることはない。それを少々残念に思う。ふと、シメオンが本から顔を上げた。

「風呂はどうだったかな？」

アナベルはとてもよかったです、と微笑む。

「それはよかった。温泉は我が国の自慢の一つだからな」

「凄く温まりました。母国ではほぼ行水だったので感動しました。これから毎日入れるなんて、こんな贅沢よいのでしょうか」

そう話しながら、ごそごそと荷物を探った。

「アナベルに不自由はさせない。一生この国で面倒を見るつもりだ。贅沢などと思わず、遠慮せずに楽しんでくれ」

彼女は出会ったばかりの王の優しい言葉に不覚にも泣きそうになる。それを誤魔化すように、取り出した小箱をシメオンに差し出す。

「なんだ？」

「私からの贈り物です。このようなもの以外、差し上げるものがなくて心苦しいのですが」

シメオンはそっと箱を開けた。

「これは……耳飾りか」

「ええ、獣人国の民は耳飾りを好んでつけると聞いたことがあります……宝石はアメジストです。小さいですが、偶然にもシメオン様の瞳の色と一緒にですね」

彼の顔がほころぶ。

「ありがとう、気に入った。こんな色の石は初めて見た。この国では宝石が流通していないからな。とても貴重なものだ」

アナベルはホッと胸を撫で下ろす。

（気に入ってもらえてよかった）

「……そういえば、側近の方々にもシメオン様にも、しっぽがあるのですよね。皆さん、長い外套を着ていらっしやっただで見えませんでしたけど……」

「ああ」

シメオンが背中を探ってそれを出した。黒くて先っぽの白いモフモフのしっぽが現れる。

「まあ！」

アナベルは両手の指を握り合わせる。

「かつ、可愛い！」

「可愛い……のか」

「さ、触っても？ あ、ブラッシングしましょうか？」

「いや、あの、アナベルがやりたいのなら任せよう」

アナベルは自前のブラシとヘアオイルを急いで取り出すと、ベッドに飛び乗る。

「きゃあ！ 凄い！ 柔らかい」

「……そうか」

毛並みに沿って丁寧にシメオンのしっぽをブラッシングした。

「上手いものだな」

「ありがとうございます。……本当に、こんなにいい待遇、痛み入ります」

シメオンが不思議そうに訊ねる。

「人間の王族の生活と比較すれば、かなり質素だと思うが」

アナベルは苦笑いをした。

「母国では王子も王女も名ばかり、贅沢していたのは王とその取り巻きだけです。王女

は学問と礼儀作法を、王子は武術を否応なしに叩き込まれ、道具として利用されるのです。それを除けば使用人と扱いは変わりませんでした」

「なっ……！」

シメオンは驚きを隠せないようだ。

「あの国は長く持たないでしょう。愚王ももう高齢ですし民も疲れている。跡取りもない。……残された姉妹だけが心残りです」

アナベルはブラッシングを終えると、ヘアオイルを塗り込んだ。

「これは私が調合したんです。安眠を誘う花の香りのエキ스가入っています」

「そうか、いい香りだ」

「ふふ。今夜はシメオン様のしっぽと私の髪は同じ匂いですよ」

シメオンがアナベルの髪を掬い取って鼻を近付ける。

「本当だ」

アナベルはその様子を啞然として見ていた。

獣人は皆、このような振る舞いをするのが当たり前なのだろうか。

つまり、男女の距離が近いというか、気軽に触れるというか……

褥のことに関してはうんざりするほど教えられたが、男女の機敏にはとんと疎い。そ

んな自分には判断しようがないけれど、まあ、嫌われてはないってことだと思おう。

アナベルは熱くなる頬を見られないように俯いた。

「アナベル、自国で辛い思いをした分、この国では幸せに暮らしてくれ。俺ができる限り力になる」

その言葉に、低頭する。

「勿体ないお言葉でございます。けれど、シメオン様に番が見つかった、もしくは私の母国が減びた時には遠慮なく放り出してください。私は既に何も役には立ちませんが、ご迷惑をおかけすることは望みません。一人で庶民として生きていく準備もしてまいりましたから」

「アナベル……」

「さあ、寝ましょう。明日はフォルクス殿が城下町を案内してくださるそうですわ。楽しんです」

アナベルは明るく言うのと、自分のベッドに向かった。

「お休みなさい。シメオン様」

布団を被って目を閉じる。ふつかふかのお日様の匂いにする布団に包まれ、長旅の疲れもあつてか、すぐにうとうとと微睡んだ。

「お休み、アナベル」

シメオンの心地好い低音の声が聞こえたが、まぶた瞼を上げられなかった。

翌日。

アナベルはフォルクスと並んで王都を歩いていた。五人いる側近のまとめ役ともいえる彼は、黄金色の大きな立耳を持つ、優しげな面立ちの美青年だ。耳より少し薄めのプロントを背中の中ほどまで伸ばしているせいか、一見性別を疑いそうになるものの、その理知的な黄緑色をした瞳の奥には人を威圧する強さを湛えている。

暫く散策したのち、フォルクスはある店の前で足を止めた。店先に置かれたベンチにアナベルを座らせ、紺色の暖簾をくぐって中へ消える。

少し汗ばむような陽気の中、吹いてきた涼しい風に吹かれ、アナベルは目を細めた。その目の前に、にゅつと差し出されたものがある。

それは、串にいくつもの丸いものが刺さった食べ物だった。薄茶のトロリとしたタレがまぶしてある。

「団子です。美味しいですよ」

思わずのけ反ったアナベルに、フォルクスが微笑みながら説明した。

「この甘味屋は妻の実家なのです。団子は一番の人気で、すぐに売り切れてしまうんですよ」

「そうなのね。じゃあ、さっそくいただきます」

一口食べたアナベルは目を丸くしてフォルクスを見た。

「美味しい！ モチモチッ」

「そうでしょう、私の大好物なんです」

彼は柔らかに笑う。

「それにしても活気に溢れていい町だわ」

「ありがとうございます」

町には大勢の人が行き交い、店先では呼び込みの声が響いている。町の中央に設けられた広場には屋台が並び、歌や楽器の演奏を披露する大道芸人達が観客を集めていた。

その様子を微笑みながら見つめているアナベルに、フォルクスがそっと声をかける。

「姫様、ちよつと寄りたいところがあるのですが、お付き合いただけますか」

アナベルは快く承知した。

そうして着いたのは薬屋だ。

「フォルクス、何処が悪いの？」

「いえ……あの」

フォルクスは言い淀んだが、意を決したように話し始めた。

ここ一年ほど性欲が湧かないと俯く。大きな耳がしゅんと垂れている。

「妻は二人目が欲しいと言うのですが、まったく役に立たず……仕事忙しいことは理解してくれていますが、どうやら浮気を疑っているようです」

仕方なく、薬師に精力増強効果のある薬草を処方してもらっていると言う。

「最初は私だけかと思ったのですが、どうやら他の側近も、そしておそらく王にも同じ症状があるのではないかと推測しています。彼らはまだ独身なので、大事には捉えていないようです……」

見目がよく実力もある出世株の彼らは、元々女性からの人気が高く入れ食い状態。それこそ一年ほど前までは皆、派手に遊んでいたそうだ。

（なんと……あの王までもが）

アナベルは遠い目をした。

（何処の国でも男って奴は……）

「なんとか原因を掴みたいと密かに調べていたのですが、まったく手掛かりがなく、正直諦めかけていました」

アナベルは腕を組み、考えた。

確かに側近と王が揃いも揃って精力が減退するなど不自然だ。それは間違いなく、番を嗅ぎ分けることへの支障にもなるだろう。

「フォルクス、それ、私も協力させて」

フォルクスは耳をピンと立てて、アナベルの手を握った。

「ありがとうございます！ 外からいらっしやったアナベル様なら違う視点で見えることもできるでしょう。デリケートなことですし、確証がなかったので、一人で長く思い悩んでいたのです。お申し出、大変心強いです！」

アナベルは眉間にシワを寄せて考え込んでいた。

フォルクスの証言と、今まで調べた事実を頭の中で並べる。

症状が出始めたのは一年ほど前から。

（多少個人差はありそう）

対象は側近と王に限られる。

（他の城仕えの者は、大丈夫みたいだ）

性欲減退の原因としては、過労、食事の偏り、なんらかの疾患が一般的だと聞くが……

仕事が忙しかったのは確かとはいえ、ここ一年は落ち着いているらしい。シメオンも休日はしっかり休むように指導しているようだ。

食事はそれぞれ好みが違うので、メニューはバラバラ。皆、健康そうで深刻な疾患があるようには見えない。

「アナベル、どうした？ 何か悩み事か？」

シメオンがデスクから訊ねた。アナベルはそちらに顔を向ける。

「シメオン様。ここ数年、恋人がいたことは？」

予想外の質問だったようで、彼は目をパチパチさせた。

「いや、いないが……」

「番でなくとも欲情は可能と聞きましたが」

「そうだな」

「なぜ？ なぜ、恋人を作らないのです？ 番じゃない者同士の割り切った交際には肯定的な風潮だと聞きましたが」

シメオンは頬杖をつく。

「そういえばなんでかな？ そんな気にならない」

アナベルは立ち上がり、モスグリーンのワンピースに手をかけて、ボタンを外し始めた。

「ア、アナベル!」

シメオンはぎよっとして彼女を止めようと椅子から腰を上げる。

アナベルはボタンを外したワンピースで走り寄り、シメオンの真ん前に立つと、胸元をバツと左右に開いた。背中を反らし、白い胸の谷間を見せつけるように背伸びをする。

シメオンは固まった。

「ど、どうです?」

「どうとは?」

「こう、ムラムラツとききますか?」

「アナベル、馬鹿なことを言っていないで胸をしまえ」

アナベルは溜め息をついてボタンを留める。

「やつは駄目かあ、私のささやかな胸じゃなあ……、シメオン様のグツとくる女性のタ
イプってどんなのですか?」

シメオンはあつさりと踵かかとを返した彼女に拍子抜けして、椅子にどさりと腰を下ろす。

「胸と尻のデカイ、色白で金髪巻き毛の……」

「ほほう、意外と定番ですね。しつぽと耳は?」

「そこは、あまり拘こだわりがない」

再びシメオンのほうを向き、アナベルは訊ねた。

「シメオン様、想像してください。今ここにシメオン様の理想そのものの金髪美女が現れたとしたら、どうします?」

シメオンが真顔で答える。

「どうやって城に侵入したかを問い詰める。城の外庭は国民に開放しているとはいえ、執務室と居住エリアは立入禁止だからな」

アナベルは額ひたいに手をやり、天を仰あおいだ。

「……そうじゃなく。じゃあ、パーティーで出会ったとして」

「眺める」

「はあ?」

「何処の令嬢かも分からんのに、いきなり声をかけたら後々面倒だからな。眺めるだけなら平和に済む」

アナベルは腰に手を当てて、啞然とシメオンを見た。
(こりゃあ重症だわ)

* * *

シメオンはソファに座って考え込んでいるアナベルをチラリと窺った。

（さっきのあれはなんだったんだ）

不覚にもどきまぎしてしまった自分を恥じる。

誘惑しようとしているのかと思ったのに、どうやらそういうわけではなさそうだ。

そこでふと思う。

（そういえば、最後に女を抱いたのはいつだろう）

忙しくはあったが、以前はその疲れも性欲が高まる原因となり、手頃な女と一夜を共にすることも多かったのだが。

最近はまったくその気にならない。

公務を終えたら、食事をして風呂に入って寝る。

なんとも健全な毎日だ。

シメオンは書類の陰からアナベルの横顔を盗み見た。

王女らしからぬ、遅い娘だ。厳しい生い立ちの中でも自分を失わず、しっかりと自

分の足で立っている。

その姿は眩しく健気だ。

（悪くない。灰色の髪にエメラルドの瞳。細身だがふつくと張り出した白い胸……むしろ……）

シメオンはハッとして浮かんだ思いを振り払った。

アナベルは保護対象。

そして人間だ。

やがて番を迎える自分に縛り付けるなど、あつてはならない。

（そろそろ王城でもパーティーを催すか……）

シメオンは再び目の書類に集中した。

アナベルは毎晩シメオンのしつぽをブラッシングする。

シメオンも気持ちが良いので咎めようとは思わなかった。

ヘアオイルの香りも好ましい。

「お耳にも塗りましょうか？」

アナベルが思い付いたように言って、シメオンの頭上に手を伸ばした。薄い夜着に包

まれた胸が目の前に迫り、シメオンは唾を飲む。

広めに開いた胸元から、昼間見た白い胸の谷間が見えていた。

その柔らかそうでいい匂いのする身体に触れたい。欲望が突如、湧き起こる。昼間は感じなかったのに。

シメオンは目を瞑り息を止めて、その本能を抑え込む。

暫くすると、それは綺麗さっぱりなくなっていた。

(やはり気のせいだ。人間に欲情することなどあり得ないのだから)

グルーミングを終えたアナベルはベッドに入り布団を胸までかけると、笑顔でお休みなさいと言って目を閉じた。

当初は他人と同じ部屋で寝ることに抵抗があったが、今は当然のように彼女の存在を受け入れている。静かな寝息も心地好く思えた。

番が見つければ、アナベルと二人で過ごすこの穏やかな夜は終わる。

それに一抹の寂しさを感じるシメオンだった。

ある日のこと。

廊下を歩いていたシメオンは、こそこそと顔を寄せ合って話すフォルクスとアナベル

の姿を目撃した。

彼女が側近達と親しくしているのは好ましいが、距離が近すぎる。胸がモヤツとした。

「おい」

気付くと、不機嫌な声で呼び掛けていた。

二人はハッとしたように顔を上げる。

「なんの相談だ？」

そう訊ねると、フォルクスは取り繕うような笑みを浮かべた。

「もうすぐ娘の誕生日なので、姫様に贈り物の相談に乗ってもらっていました」

アナベルも頷く。

「……それはよいが、適度な距離を心掛けろ。お前は既婚者だし、アナベルは俺の側室なのだから」

フォルクスが頭を下げた。アナベルは気まずそうに俯く。頬に長い睫毛の影ができている。

その場を立ち去りながら、シメオンは後悔した。

まったくもって自分らしくない振る舞いだ。

窓の外から城下町を見下ろす。

（明日の夜にでもチャドを誘って飲みに出掛けようか、そこでよさそうな女を見つけたら……）

きつと、長く女性を抱いていないせいで、おかしなことを考えてしまうのだ。
シメオンは頭を掻いた。

* * *

アナベルはシメオンの後ろ姿を見送りながら、フォルクスに訊ねた。

「もしかしてシメオン様、怒ってた？」

フォルクスは少し考え込む。

「そうですね、王にしては珍しい、きつい口調でした。……まあ、さほど気にされなくても大丈夫です。しつこい方ではありませんから。ところで話の続きですが、原因は執務室にあると？」

「そうなの。六人の共通点がそれしか考えられないのよ。ここ数年の間で、何か思い当たることはある？」

その問いに、彼は頷く。

「関係があるか分かりませんが、二年ほど前に改装しています。隣の部屋と繋げて広げたんです。その際に、王の希望で壁を全面塗り替えました」

数日後。

公務が忙しいフォルクスの代理として、アナベルに付き合ってくれたのはドルマンだった。鋭い美貌を備えた彼は、少々表情に乏しい青年だ。肩で切り揃えられたストレートの黒髪、その頭上には黒い立耳。凛と立つ様は近寄り難くも感じる。

しかし、よくよく話してみると口数が少ないだけで穏やかな親しみやすい性格であると分かった。

彼と和気あいあいと語り合いながら、アナベルは執務室の改装をした業者を訪ねる。それから左官職人の家へ向かい、最後に、目的だった土壁の資材屋までたどり着く。

「王様はオレンジ色をご希望だったので、赤味を出すのに苦労しました。赤い染料は通常あまり使わないものですから。色々試行錯誤してたどり着いたのが、これです」

資材屋の長い垂れ耳の男が指差したのは、作業小屋の横にある林だ。

どうやら、そこに何本も生えている、細く赤い幹の樹木を指しているらしい。

「ボラカルっていうんですけどね、染料屋から教えてもらったんです。偶然、私の家の

傍にも生えておりましたので、これの皮から汁を絞り出して土に混ぜてみたんです。そしていい色が出ましてね」

アナベルは資材屋に剥がしたボラカルの皮を譲ってもらった。

「そんなもの、どうするんですか？」

ドルマンが不思議そうに問いかける。

「うーん……ねえ、この辺で一番植物に詳しいのは誰かしら？」

「薬屋のメルバ婆ですね」

彼は即答した。

「国一番の薬師で生き字引ですよ」

そしてアナベルは、フォルクス行き付けの薬屋へ幾日ぶりかに行くことにした。

ドルマンがメルバ婆に紹介してくれる。

「婆さん、この人が王の側室になったアナベル姫だよ」

メルバ婆は目深に被ったロープの下から覗く小さな赤い目で、アナベルを値踏みするように見た。

「ほう、なかなかの別嬪さんじゃないか」

「ありがとうございます」

「お綺麗だけじゃないぞ、趣味は狩りで、弓矢を華麗に扱うらしい。獲物を捌くのもお手のものなんだ」

ドルマンが、ねえ、とアナベルに視線を向ける。アナベルは少々はにかみながら頷く。

「母が狩猟の民だったので」

「へえ、なんていう部族だい？」

答えると、メルバ婆は目をしばたいた。

「なるほどねえ……そういうわけかい」

メルバ婆の不可解な呟きに、ドルマンとアナベルは顔を見合わせる。

「で、この婆になんの用だい？」

小柄だが威圧感のある老人の問いに、アナベルは慌てて資材屋から貰った木の皮を取り出す。

「ボラカルっていう木で、赤色の染料として使用したらいいのですが、間違いないですか？」

メルバ婆は受け取り、それを至近距離で舐めるように見た。

「確かに似ているけどねえ……これはボラカルじゃないね。ソラン草だ」

ドルマンが首を傾げる。

「いや、婆さん、草には見えなかったぞ」
 「かなり大きく育つからね。だけど二、三年で枯れちまうんだ。よく似てるからねえ、素人は間違えてもしょうがない」

アナベルは急いで訊ねる。

「ソラン草には薬効はあるのですか？」

メルバ婆は頷いた。

「ああ、あるよ。うちの店にも煎じたものがある。あんまり売れないけどね」

* * *

「あ、姫様だ」

執務室の窓から外を見下ろしていたレッサードが声を上げた。金色の丸い耳がびくびくと動いている。柔らかいブルネットの癖毛に青色の大きな瞳、童顔で小柄な彼は、側近達の中でもムードメーカー的な存在だ。可愛い見かけの割に毒舌で、しばしば知らずに人を傷つける。

そして、その隣にいたレッサードより二回りほど大きな獣人も、ひよいと下を覗き込

んだ。

「今日はドルマンと一緒に」

間延びした声で話す彼は、初日にアナベルを肩に担いだベアルだ。短く刈り込んだ髪から小さな茶色の耳がひょこっと生えている。精悍な顔つきながら性格はマイペース、怪力が自慢の癒し系だ。

「いいなあ、僕も姫様とお出掛けしたいです」

「俺と一緒に狩りをしてみてえな、どれほどの腕前なんだろう」

「大人気だな」

シメオンが口を挟んだ。

「もし、番がこのまま見つからなかったら……姫様を下賜してほしいなあ……」
 窓に貼り付いたレッサードがポツリと漏らした言葉に、シメオンはぎよっとしてその背中を見る。

「じゃあ、俺も。姫さんと一緒になったら楽しそうだよなあ」

ベアルも加わった。

「真似しないでよ。ベアルは駄目だよ、お前みたいな巨漢は姫様が可哀想じゃないか、体格差は夜の生活の深刻な……」

「お前らしい加減にしろ！」

シメオンは側近達を叱りつけた。

「もう、こうなったら一刻も早く見合いパーティーを開催する。レッサード、お前が段取りしろ」

「はい！」

レッサードが背筋を伸ばす。シメオンは息を吐いて、隣に立つチャドにこそつと話しかけた。

「今夜一杯付き合え」

シメオンと同じ年齢のチャドは無造作に整えた赤毛に、もふもふの茶色い耳を持つ獣人だ。面倒見のいい性格で、細やかな気配りもでき、モテる。一時期はシメオンも凌ぐほどの人気を博した色男だ。女を目的に据えた飲み場に誘うには、最適の相手なのである。チャドは主の意を汲んだとばかりに、ニヤリと笑って頷いた。

「——実際のところどうなの？ レッサードが言うように、番が見つからなかったら姫さんを王妃にするってのは王的にあり？」

バーのカウンターで、チャドはシメオンに訊ねた。

「あり得ない。アナベルは人間だぞ」

「試してみねえと分からねえぞ」

シメオンはチャドを横目で睨む。

「アナベルは保護対象だ。幸せになるために尽力してやりたいが……パートナーとしては無理だ」

チャドはフツと笑うと、面倒臭そうに言った。

「まあ、古参どもが認めねえよな。何より血の継続を重んじるのが獣人だからなあ。王家の血筋に人間の血は入れたがらねえだろう」

シメオンはグラスをグツと握る。

「じゃあ下賜すんの？ 俺でもいいぜ」

グイッと酒を飲み干すと、グラスを音を立てて置いた。

「なんなんだ、揃いも揃ってお前らは。俺は……アナベルの希望に沿うつもりだ。無理に未来を押し付けるつもりはない！」

チャドはシメオンを見て、ふうん、と呟く。その時、背後から艶やかな声がかかった。

「あら、シメオン様、チャド様もお久しぶり」

チャドとシメオンを挟むように両脇に見知った美女が座る。
二人とも金髪巻き毛にダイナマイトボディ、スパイシーな香り。

「ああ、相変わらずいい女だな」

女達は流し目を送ると、白い耳と白い尾を優雅に動かした。

シメオンは寝室のドアをそっと閉めた。

アナベルは既に寝ているようだ。足音を忍ばせてベッドに近付き、覗き込む。

長い睫毛を伏せ、唇を緩く閉じ、健やかな寝息を立てる愛らしい寝顔だ。

シメオンは暫し見入った。

彼女にブラッシングをしてもらいたくてしつぽが疼く。彼はしつぽを自ら撫でた。
結局、女とは飲むだけで別れた。

その気になれなかったのだ。それはチャドも同じだった。

女の刺激的な香りより、アナベルが塗ってくれるオイルの優しい匂いを嗅ぎたい。
しなだれかかる柔らかな身体より、しつぽを撫でる繊細な手が恋しかった。

シメオンはアナベルの頬に手を伸ばす。

しかし、触れる直前で手を引いた。

「——シメオン様、寒かったんですか？ しつぽを抱き締めて寝てましたよ。可愛い」

起きた途端、アナベルから開口一番投げられた言葉に、シメオンは布団を被った。

そして、朝食後。

「二人とも調子が悪そうですね、二日酔いですか？」

フォルクスが明らかに精彩を欠いたチャドとシメオンに声をかけた。

「……ああ、まあ、な」

チャドは窓枠に腰掛け、窓におでこを押し付けている。シメオンは机に突っ伏していた。
「昨日は楽しんできたんじゃないの？ 酒場で美女に挟まれてるのを見かけましたよ」

レッサードが王の伏せられた耳を摘まんだ。

「え、うーん、いや……」

その、ハッキリとしない返しを聞き、ドルマンとフォルクスが目を合わせる。

「どうもその気にならなかったんじゃないですか？」

フォルクスの言葉に、シメオンは顔を上げ、チャドが振り向く。

「……皆もここ数年、精力が落ちている自覚はないか？ 女に言い寄られても断っているだろう。以前なら手当たり次第だったレッサードも、最近は大人しいんだ」

フォルクスとドルマン以外の面々は戸惑いながらも頷いた。

「現に昨日の晩も、あんないい女を目の前にしてまったく反応しなかった」

チャドは腕を組み、嘆く。

「実は私も一年ほど前から精力の減退に悩んでいて、メルバ婆に薬を処方してもらっている。原因にまったく心当たりがないので、疑問に思っ調べていたのだが……」

ドルマンが言葉を引き継いだ。

「昨日、私達の股間がこぞって大人しくなってしまった原因が分かった」

皆の視線が二人に集まる。

「――壁の着色材い？」

四人の声に、ドルマンは頷く。

そもそのきつかけは、資材屋が壁材のボラカルとソラン草を間違えたことにあった。執務室に塗られた特殊なオレンジの壁、その色を出すために用いた赤の染料。そう、赤の染料ボラカルと思い込んで土に混ぜ込んだ汁は、実はソラン草のものであったのだ。

「ソラン草は薬草で、その薬効は精力の抑制、減退だ」

皆は啞然とした表情でドルマンを見た。

「メルバ婆曰く、壁に塗り込むという前例はないが、気化した成分を毎日浴びるうちに

慢性化したのかもしれないと。二年も経つので壁の薬効は抜けている可能性が高いが、念のために壁を剥いで塗り直したほうがいいと言っていた。『朝晩服用するんだ。個人差はあるが徐々に回復するはずだ。一日も欠かしちゃならないよ！』だそうだ。――と、いうわけで」

ドルマンはシメオンのデスクに二つの薬瓶を置いた。

「性欲増幅剤と解毒剤。これから朝晩、皆でこれを服用しましょう。天下の獣人王とその側近が不能なんて由々しき事態だ」とメルバ婆がお怒りです」

フォルクスがシメオンに書類を差し出す。

「壁の塗り替え工事の許可書にサインを。ただいま東側の会議室を仮の執務室に改装中です。準備ができ次第、お移りください。お前達も荷物を運ぶのを手伝えよ」

側近達は揃って頷く。

「流石、フォルクスだな。俺はまったく気付かなかった。面目ないことだ。それにしてもよく原因が分かったな」

フォルクスとドルマンは目を合わせて頷き合うと、シメオンに告げた。

「実は、今回の件の一番の功労者はアナベル姫です」